

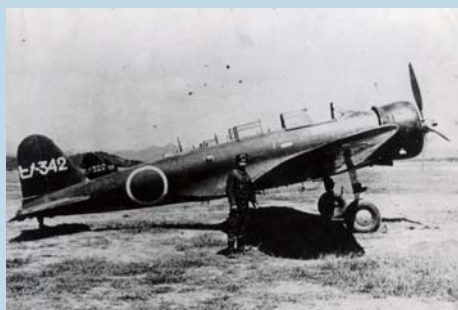
加西・鵜野飛行場跡

(旧 姫路海軍航空隊基地)

加西市教育委員会

目次

年表	2
姫路海軍航空隊基地	4
川西航空機工場	10
国鉄北条線列車転覆事故	13
空襲	14
戦後の鵜野飛行場	16
地形図・空中写真から見た鵜野飛行場の変遷	17
鵜野飛行場跡マップ	26
今に残された戦争施設	28



年表

- 1920（大正9） ●川西機械製作所創設、その後飛行機部設置
- 1928（昭和3） ●川西航空機株式会社創立（川西機械製作所飛行機部の事業を継承、（11月）、同社海軍指定工場に（12月）
- 1930（昭和5） ●川西航空機、本社及び工場を武庫郡鳴尾村に移転（5月）
- 1931（昭和6） 柳条湖事件（満州事変、9月）
- 1937（昭和12） 盧溝橋事件、日中全面戦争（7月）
- 1941（昭和16） マレー半島上陸、真珠湾攻撃、アジア太平洋戦争（12月）
●川西航空機宝塚製作所を開設、操業開始（12月）
- 1942（昭和17） ●川西航空機甲南製作所を開設、操業開始（2月）
●仮称一号局地戦闘機の試作に着手（4月）
アメリカ軍、初の日本本土空襲（ドゥリットル空襲、4月）
ミッドウェー海戦敗戦（6月）
●川西航空機姫路製作所を開設、操業開始（7月）
●仮称一号局地戦闘機完成、海軍制式機に採用、「紫電」と命名、量産実施（12月）
- 1943（昭和18） ガダルカナル島から撤退（2月）
●仮称一号局地戦闘機改の試作に着手（3月）
◇姫路海軍航空隊基地建設工事はじまる（3月）
◇九会国民学校移転（9月）
◇姫路海軍航空隊基地開隊（第十二連合航空艦隊、10月）
学徒出陣（10月）
●仮称一号局地戦闘機改完成、海軍制式機に採用、「紫電改」と命名、量産実施（12月）
- 1944（昭和19） ◇姫路航空基地にて、第三一空、第三二空編成、マニラに配備（3月）
サイパン島陥落（7月）

(◇は鶉野飛行場関連事項 ●は川西航空機関連事項)

レイテ沖海戦敗退、海軍神風特別攻撃隊出撃 (10月)

B29による日本本土空襲の開始 (11月)

●姫路製作所鶉野工場を開設 (12月)

1945 (昭和 20) ◇川崎航空機明石工場を B29 が精密爆撃 (1月)

東京、大阪、神戸、名古屋を B29 が焼夷弾爆撃 (3月)

◇アメリカ軍艦上機により、姫路航空隊基地攻撃 (3月)

◇姫路航空隊特別攻撃隊白鷺隊、宇佐航空隊に進出 (3月)

◇紫電改不時着により、国鉄北条線列車転覆事故 (3月)

アメリカ軍、沖縄本島上陸 (4月)

◇沖縄戦支援、菊水作戦による特攻出撃 (4月)

◇姫路海軍航空隊閉隊 (5月5日)

●甲南製作所を B29 が精密爆撃 (5月11日)

●鳴尾、姫路製作所を B29 が精密爆撃 (6月9日、22日)

●川西航空機、国営第二軍需工廠に (7月)

◇アメリカ軍艦上機により、姫路航空隊基地攻撃

(7月24日、28日、30日)

ポツダム宣言受諾の玉音放送、終戦 (8月15日)

◇占領軍、姫路航空隊基地に進駐 (10月、46年5月まで)

緊急開拓事業実施要項を閣議決定 (11月)

◇旧姫路航空隊基地跡地に入植 (秋)

1949 (昭和 24) ◇旧姫路航空隊基地跡地の開拓土地売渡はじまる (11月)

1957 (昭和 32) ◇滑走路、アメリカ軍による接收解除 (大蔵省所管)

1962 (昭和 37) ◇滑走路の4分の1、農林省に引渡 (4分の3、防衛庁)

1966 (昭和 41) ◇県立兵庫農科大、国立移管に伴う新農場建設工事開始

1994 (平成 6) ◇KASAI スカイパークフェスティバル開催 (11月)

1999 (平成 10) ◇滑走路わきに、鶉野平和祈念の碑建立 (10月)

姫路海軍航空隊基地

1943年（昭和18）10月、姫路海軍航空隊（通称「姫空」）が鶉野に開隊した。それに先立つ同年三月、基地の建設工事がはじまった。この工事には、地元や朝鮮人の労働者、近隣の加西郡、加東郡などからの勤労奉仕団が従事した。「父は戸主会から、母は婦人会から、私は女子青年からと、定められた日になると例えば田畑が多忙でも」「出勤しないと非国民」と言われたという。敷地内（鶉野、中野、下宮木）にあった住宅や九会国民学校（現小学校）の移転も余儀なくされた。九月には一部使用が開始された。

1942年（昭和17）6月のミッドウェー作戦の失敗により、日本海軍は戦場での制空権の重要性を認識し、同年秋、パイロットを急遽養成するため、姫空を含め、基地航空兵力の増隊を決定した。

姫空は、実用訓練をおこなう練習部隊であった。初級、中級訓練を終えた練習生が、艦上攻撃機、練習機による実用教程を終え、全国の航空隊に赴任していった。また、44年（昭和19）3月には、内地での燃料不足により、練習を外地でおこなうため、鶉野で航空隊（第31空、第32空）を編成し、マニラへ向かって出発した。

航空隊員には、基地周辺の民家に「下宿」が準備された。外出日に立ち寄り、加西の人達と航空隊員の交流がおこなわれた。

1945年2月、戦局の悪化に伴い、実用教程練習航空隊からも特別攻撃隊が編成されることになり、姫空からも志願者が募られた。特攻隊は白鷺隊と名づけられ、3月には宇佐海軍航空隊へ進出した。4月には沖縄戦支援のために6回にわたって串良基地から出撃し、63名が戦死した。姫空が閉隊されたのは、45年5月5日、この日第五航空艦隊に編入された。一方、航空基地は、飯盛山（現フラワーセンター）にトンネルを掘り、誘導路の整備を行い、本土決戦に備えた。終戦時には、飯盛山に居住区、指揮所などが設けられた。



姫路海軍航空隊基地の広域概要図

(史料名：「航空基地図」(本土関係) 33 姫路航空隊 防衛研究所図書館蔵)

史料にみる基地の概要データ

位置：兵庫県加西郡下里村 基地名：姫路
最寄り駅よりの方位（距離 料）：播丹線法華口駅 N5

建設の年：1943

飛行場：1,200 × 60 混、1,200 × 200 のもの 2 本

用地面積（除飛行場）：9157㎡

格納庫：庁舎 2.092㎡、兵舎 8.919㎡

収容施設：工 1.580㎡、倉 1,454㎡ 工場倉庫：1756㎡

主要機隊数：小型 主任務：教育、作戦

隧道並に地下施設

居住、倉庫、工場、燃料、爆弾

：居（1,500 平米）、指、通、爆、燃、工倉、運搬路 8,000m

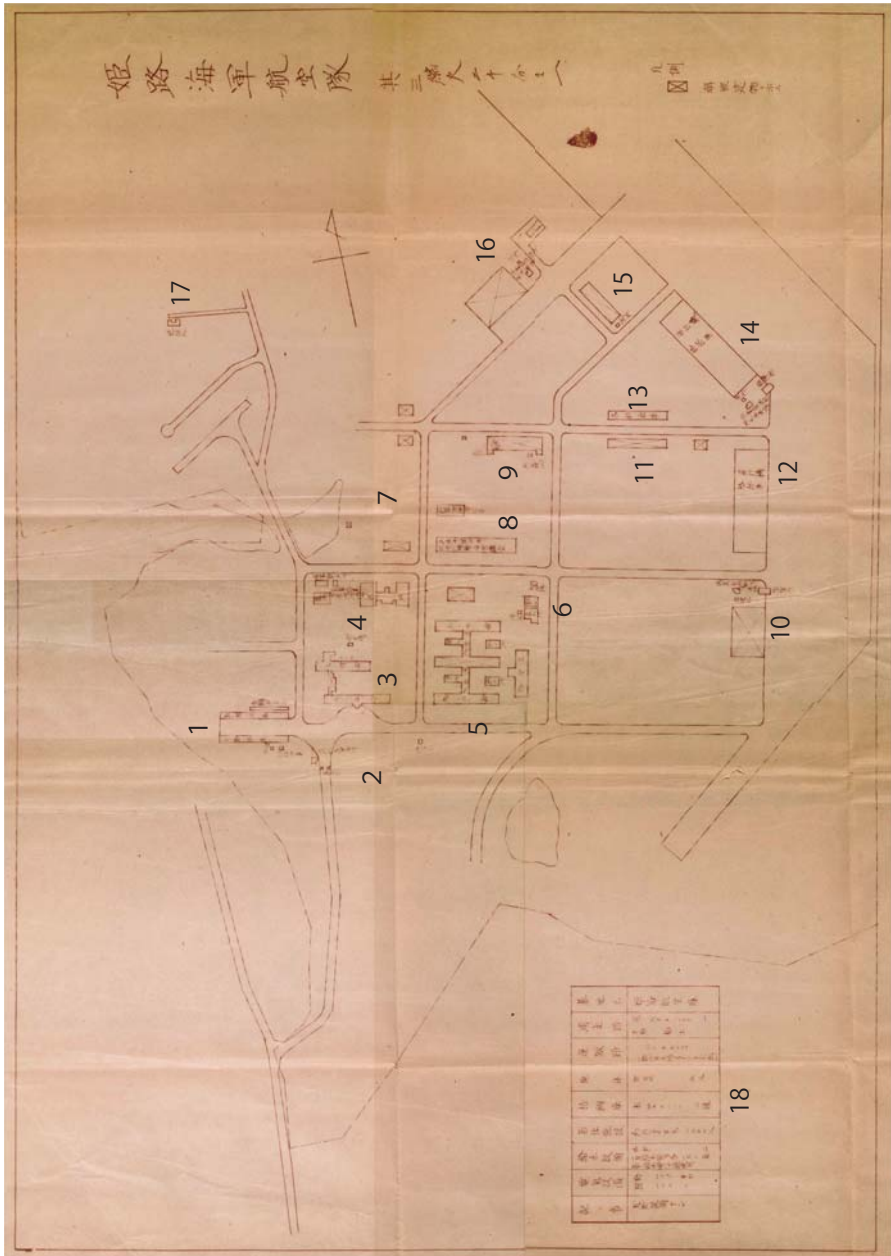
掩体：中型 10、小型 45、隧道 300 平米

（出典史料名：「大東亜戦争における航空基地一覧表」海軍航空基地諸元調査表

大阪警備府航空基地関係より抜粋 防衛研究所図書館蔵）



姫路海軍航空隊基地庁舎 （写真提供：上谷昭夫）



姫路海軍航空隊基地建物概要図

(史料名：「航空基地図」(本土関係) 姫路航空隊其三 防衛研究所図書館蔵)

1	便所	5	兵 (二階) 舎	7	×	13	各科倉庫
	燃料油庫		便所	×		14	便所
	自動車庫		洗面所	×			作業員休憩所及湯沸場
	自動車庫		物干場				指揮所
	自転車置場		烹炊所	8	兵舎兼講堂兼航空機羅撃演習講堂		飛行機格納庫
2	衛兵詰所及面会所	×	×	9	×	15	×
	□□□		便所	×			便所
	□□□		洗面所	ジュラルミン熱処理所		16	×
3	斤 (二階) 舎		物干場	10	×		便所
	×		兵舎	便所			作業員休憩所及湯沸場
	士官室	6	×	作業員休憩所及湯沸場			×
	物干場		煙突	指揮所		17	送信所
4	露場		気缶場	11	×		
	氣象観測所		石炭置場	×			(×印は解体建物)
	氣象作業水素瓶格納所		灰捨場	12	飛行機格納庫		
	道場						
18	基地名	姫路航空隊	掩体	無蓋	五五	電気設備	動 一〇〇キロ
	滑走路	混 六〇×一二〇〇 一	格納庫	木 四〇×一二〇 二棟		照	一二〇キロ
	土質	粘土	居住施設	約六二〇〇平米	一三〇〇人	記事	瓦斯設備ナシ
	運搬路	三〇×八〇〇〇	給水設備	井戸 二			
		一部中央□□マカダム (未完成)		一日給水能力各 一五〇屯			
				第二給水源は濾過使用			

川西航空機工場

川西航空機株式会社鶉野工場は、1944年（昭和19）12月に姫路製作所（姫路市天神町、現城東町）の組立工場として開設された。姫路で作られた部品を、馬車などを使い鶉野に運び、最終組み立てをおこなった。その後、鶉野飛行場で試験飛行をおこない、完成した機は海軍に引き渡された。

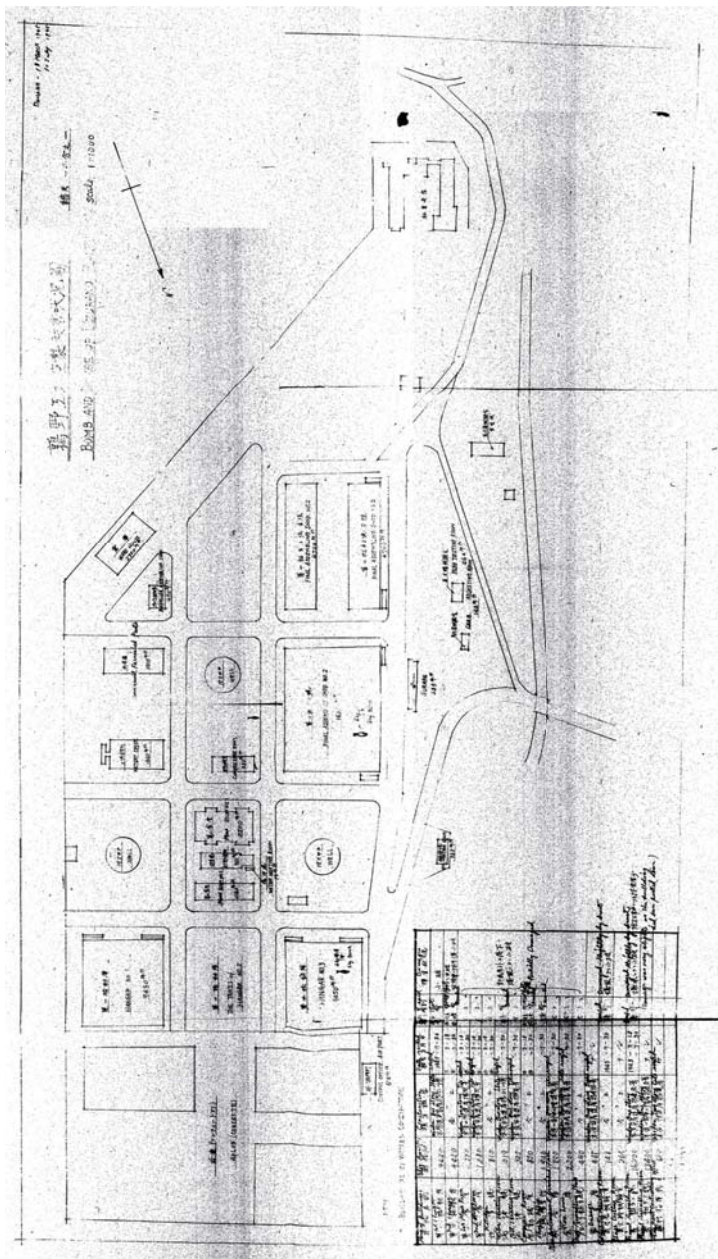
川西航空機株式会社は、現在の新明和工業株式会社（本社宝塚市）。戦前は、兵庫県西宮市に本社のある海軍機をつくる飛行機会社であった。川西は、1928年（昭和3）11月、川西機械製作所飛行機部から事業を継承し設立された（本社神戸市）。1930年には、本社と工場を武庫郡鳴尾村（現西宮市）に移し、海軍指定工場として、フロート水上機（水上機）や飛行艇^{*}の製造をおこなった。

日中戦争が始まると、海軍主導で、川西は急激に生産力を拡充していく。1939年（昭和14年）6月、甲南製作所を、続いて翌40年に宝塚製作所、42年7月には、播但線京口駅近くにあった日本毛織姫路工場の建物を転用し、姫路製作所が設立された。日本毛織の従業員の多くは、そのまま戦闘機の製造に従事した。

姫路製作所では、鳴尾製作所から技術者を招き、紫電・紫電改の量産に備えた。姫路製作所には、完成した飛行機を飛ばす飛行場がなかった。そこで、加西郡九会村（現加西市鶉野町）に建設された姫路海軍飛行場の西に組立工場を建てたのである。終戦までに姫路製作所では、紫電466機、紫電改44機が製造された。

また、45年（昭和20）に入ると、段下、笠松、北条（保木山）などに疎開工場が建てられた。北条工場は、北条町横尾の山の斜面を掘った地下工場だった。同工場に一部工作機械が運び込まれたところで、終戦をむかえた。

*飛行艇とは、「水上にあるとき、主に艇体によってその重量を支持する水上機」。「フロートによってその重量を支持する」をフロート水上機（水上機）という。



川西航空機工場の概要図

(史料名：米国戦略爆撃調査団資料 米国国立公文書館蔵)

史料にみる紫電改の概要データ

機種		乙戦(注1)	型式		単座低翼
機名		紫電改	乗員		1名
略符号		N1K2-J			
主要寸度	全幅	11.99 m	燃料搭載量 (増槽)		716 リットル (400 リットル)
	全長	9.346 m			
	全高	3.96 m	性能	最高速 / 高度	312kt/3000m
重量	自重	2657kg		上昇時間 / 高度	7'22"/6000m
	正規全備	4000kg		実用上昇限	10760m
発動機	名称	中島		航続力	全力 0.5 時后
	離昇馬力	誉二一型 1990 HP			460 哩 / 200nm /3.0km
プロペラ	形式	住友 VDM 4 翅	兵装	着弾	20 mm X 4
	直径	3.3 m		爆装	60kgX4 又は 250kgX4

注1 乙戦とは、火力と上昇力に優れた戦闘機(主に局地戦闘機のこと)

(出典史料名：海軍現用機性能要目一覧表昭和20年8月22日 第一海軍(航空)
技術廠飛行機部 より抜粋 防衛研究所図書館蔵)



紫電改 (写真提供：雑誌「丸」潮書房)

国鉄北条線 列車転覆事故

1945年（昭和20）3月31日午後3時30分頃、北条町駅発粟生行上り列車が、網引駅付近で脱線転覆した。この事故の原因は、海軍による最終検査中の紫電21型（紫電改）のエンジンが急に停止、不時着しようとした際、線路を引っかけたことによるものであった。線路が少し外れたところへ、機関車が接近、転覆。機関車の上に木製客車（一両）が乗り上げ、客車は中ほどでくの字型に折れ曲った。転覆と同時に汽笛が鳴り響いた。村では半鐘が鳴らされ、警防団の人々が駆けつけた。負傷者を救出し、竹と筵で作った急拵えの担架や戸板で網引の公会堂に運んだ。

民間人を巻き込み、死者11人、負傷者62人と言われる大惨事となった事故。にもかかわらず、結局詳しく調査されることはなかった。「軍の機密」「調査の必要無し」と憲兵隊長が言ったと、当時の車掌はのちに証言した。軍の記録には、「搭乗員殉職」のみである。



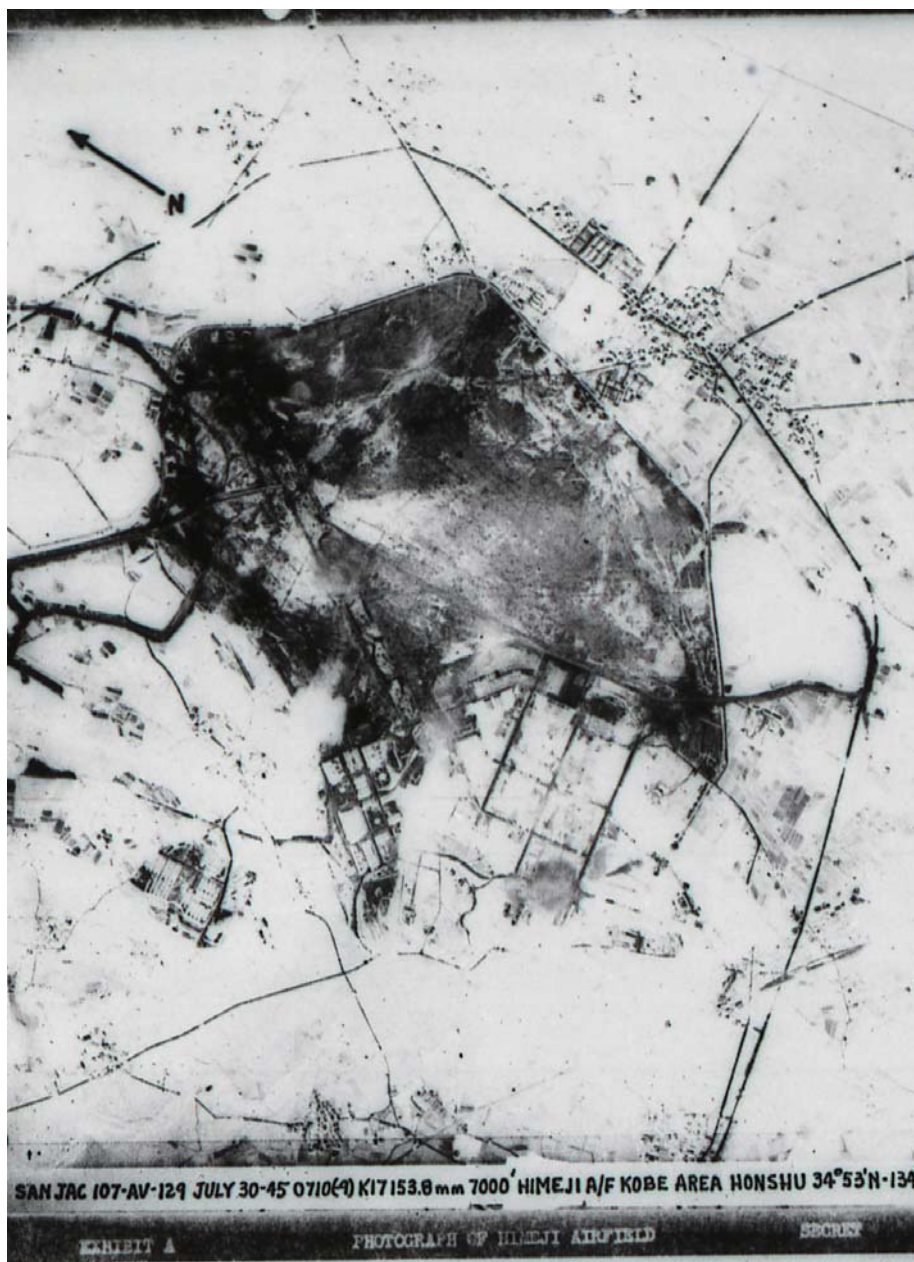
北条鉄道網引駅前の列車転覆事故解説看板

空襲

姫路航空隊基地を襲ったのは、米海軍の空母艦上戦闘機による銃爆撃であった。第1回目は、1945年（昭和20）3月19日である。この日の攻撃部隊は、第5艦隊第58機動部隊。洋上から18・19日の2日にわたって、沖縄攻略支援作戦の一環として、九州、四国、瀬戸内海方面の飛行場、工場などを攻撃した。「鶉野にも二十六機来襲、黒煙奔騰」と、当時坂本に住んでいた古家實三氏の日記にある。

本格的な攻撃は、7月24日以降のこと。部隊は、5月末に第5艦隊第58機動部隊から改称した第3艦隊第38機動部隊である。7月1日、同隊は、フィリピン、レイテ湾を出動。その任務は、日本本土侵攻作戦を容易にするため、日本の残存艦艇と航空兵力、戦争継続に必要な施設や基地の破壊にあった。西日本への攻撃は、24日から30日までであった。

米軍資料によると、姫路航空隊基地を襲ったのは、24日と30日。24日午前11時にF4U コルセア10機が、11時59分にF4U 8機が攻撃したと記されている。この日の海軍第3112設営隊戦時日誌によると、「11時40分敵艦上機本隊並二飛行隊来襲爆撃銃撃」。飯盛山トンネル入口付近で、「三発五〇疋爆弾投下され奈良空練習生一名戦死人夫三名重軽傷」したという。翌25日の記録は米軍側にはないが、古家氏は、「鶉野へも艦載機数機来襲」と記している。30日の攻撃は、午前6時50分に4機のF6F（グラマン）、9時40分に9機のTBM、9時45分に7機のF6F、午後2時に4機のF6Fの4回と、米軍資料にある。古家氏もその日の日記に、午前3回、午後1回、鶉野へ敵機来襲。翌日には、「川西（航空機）の社宅で母子三人即死、外工員、海軍兵数名の死傷者」「王子の民家五戸が機銃掃射により屋根を破壊」とその被害を記した。基地では、30日午後7時から、総員夜間作業を以て補修作業を行ったという。



爆撃当日に撮影された鷯野飛行場（昭和 20 年 7 月 30 日撮影）

（史料名：米国戦略爆撃調査団文書：海軍・海兵隊艦載機戦闘報告書

米国国立公文書館文書 国立国会図書館蔵）

戦後の鶉野飛行場

終戦後の1945年(昭和20)10月23日、アメリカ軍が元姫路海軍航空隊基地に進駐し、翌年5月まで兵器や弾薬の処理にあたった。

一方、約244万㎡に広がった基地跡では、同年秋から食糧増産のためや戦災・復員・引揚者などの受入先として、緊急開拓事業が行われた。当初約100世帯が入植したが、飛行場建設時には表土を切りとったり、ローラーで固めており、非常に開墾が困難であった。酸性の強い土質にも悩まされ、約5年間のうちには、半分の約50世帯となった。また、同地は戦争中に急遽軍によって買収されたところであり、地元の増反の要求にも答えた。入植者や地元民の努力によって、基地跡地は次第に立派な農地に姿をかえていった。

敷地の多くは次々と農地に払下げられたが、滑走路一本を含む一部はアメリカ軍に接収された。1952年(昭和27)4月には警察予備隊(自衛隊の前身)が旧航空隊兵舎に進駐、近隣の人たちに本格的に演習場になるのではと不安をいだかせた。その後滑走路のみ連絡不時着用として使われることになり、兵舎2棟も同年11月には解体され、再利用のため運ばれていった。

57年(昭和32)9月には、接収も解除され、滑走路は大蔵省の管轄となった。防衛庁(当時)は全面払下げを希望したが、農林省を通じて地元が払下げを希望し、結局その北側1/4が、62年(昭和37)夏に農林省に払下げられた。また、何度か播磨空港建設用地にと話はでたが、実現することはなかった。

一方、1964年(昭和39)頃、県立兵庫農科大学の神戸大学移管に伴い、滑走路に隣接する兵舎施設跡40haに附属農場が建設されることになった。66年度に工事着手。当時敷地内には建物基礎、防空壕などが散在し、これらの頑強なコンクリート構造物は、予算の都合上完全に撤去できず、一部はそのまま残ることになった。

地形図・空中写真から見た 鶉野飛行場の変遷

戦時中の史料は終戦時に処分され、残るものは少ない。しかし、戦前の地形図や戦後に撮影された空中写真を比較することにより、基地造成前後の地形変化や戦後の土地利用の変遷等は確認できる。

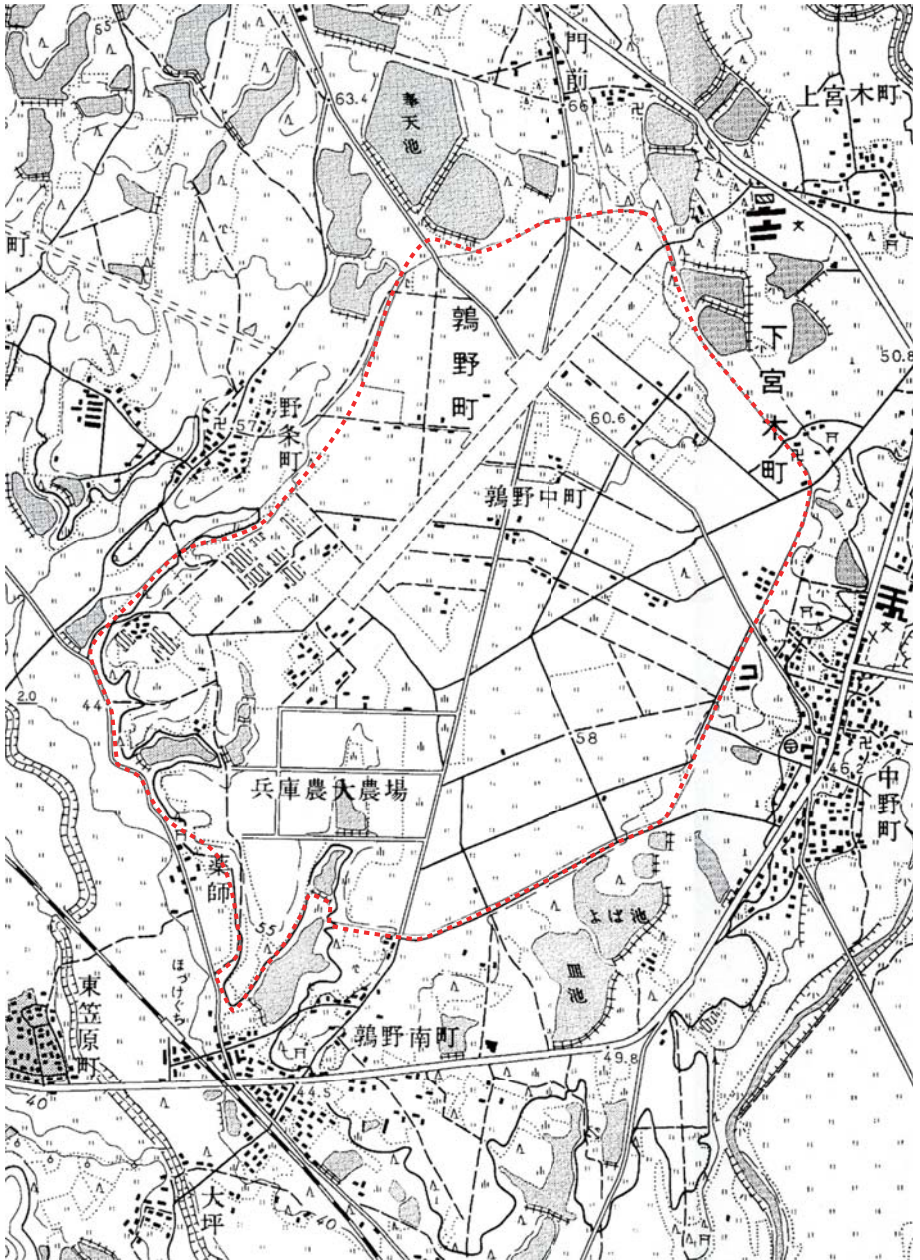
1923年(大正12)測図の基地周辺の地形図を見ると、道路沿いに宅地があり、水田等の耕作地と溜池のほか、大半が針葉樹林であった。1943年(昭和18)には基地建設の造成工事が着手され、「当時の工事はすべて人力で、スコップやつるはしで土をくずし、土の運搬にはレールを引いてトロッコを用い、このあたりの山や小高い丘を削り、池を埋め、エンジン付きのローラーで土を締め固めた。」と聞く。1967年(昭和42)測図の戦後の地形図と比較すると、基地内の針葉樹林は整地され、大小14箇所の溜池が埋められたことがわかる。

米軍により1947年(昭和22)に撮影された空中写真を見ると、姫路海軍航空隊基地の庁舎建物・格納庫、川西航空機工場の格納庫などは確認できるが、翌1948年(昭和23)に撮影された空中写真では、格納庫や庁舎の一部は解体撤去されている。掩体壕や誘導路はまだ明確に確認できる。国土地理院により1961年(昭和36)に撮影された空中写真では、基地関係の建物はすべて解体撤去されており、防空壕、エプロンや格納庫基礎、庁舎前ロータリー、貯水槽などコンクリート製施設が残るのみである。滑走路周辺は農地として利用されており、掩体壕は一部残るものの誘導路跡は道路と農地に利用されている。2004年(平成16)に撮影された空中写真を見ると、基地跡は神戸大学農場となり、農地や放牧地として利用されているが、エプロンのコンクリート基礎などは確認できる。滑走路周辺は工場用地としての利用が増加している。



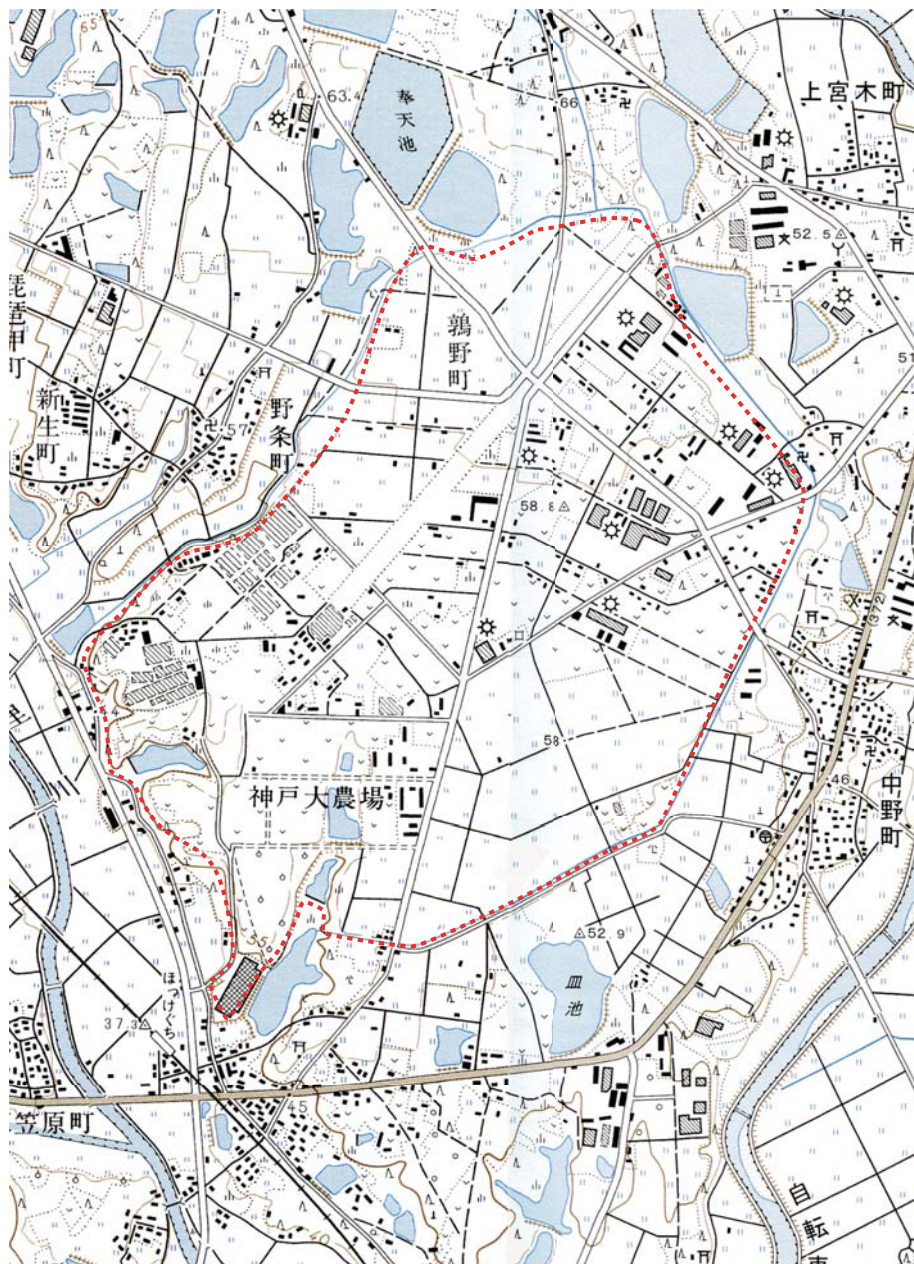
基地ができる前の周辺地形図（大正 12 年測図）

（国土地理院発行 2 万 5 千分 1 地形図より抜粋）



戦後の基地周辺の地形図（昭和 42 年測図）

（国土地理院発行 2 万 5 千分 1 地形図より抜粋）



最近の基地周辺の地形図（平成 11 年測図）

（国土地理院発行 2 万 5 千分 1 地形図より抜粋）



(昭和 22 年撮影)



(昭和 23 年撮影)



(昭和 36 年撮影)



(平成 16 年撮影)

戦後の基地建物跡地の変遷

(空中写真より抜粋 国土地理院蔵)





戦後間もない頃の鷲野飛行場全景（昭和 23 年撮影）

（米軍撮影空中写真より抜粋 国土地理院蔵）



戦後の鶉野飛行場全景（昭和 36 年撮影）

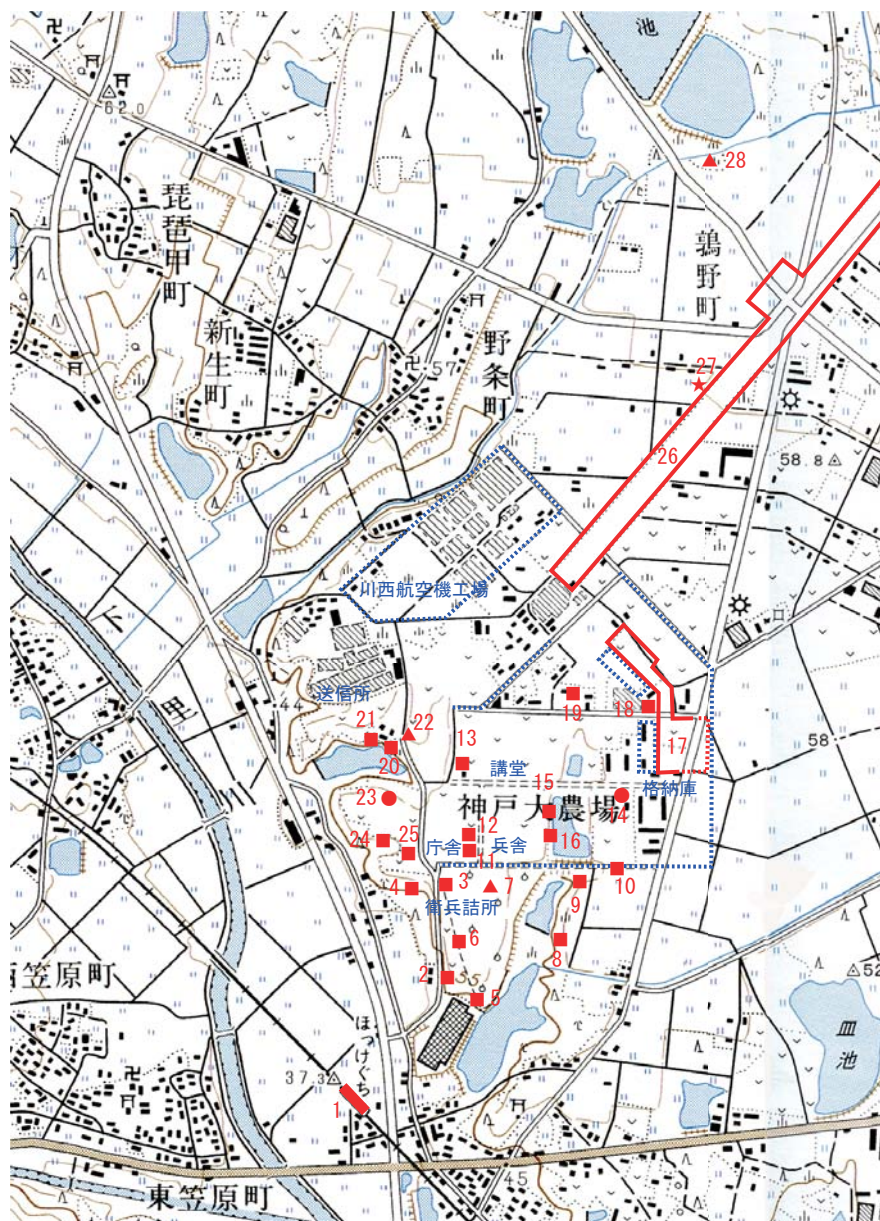
（国土地理院撮影空中写真より抜粋 国土地理院蔵）



最近の鶉野飛行場全景（平成 16 年撮影）

（国土地理院撮影空中写真より抜粋 国土地理院蔵）

鷓野飛行場跡 マップ



戦争施設は大学構内や民有地にあります。勝手にはいけません。



- 1 北条鉄道法華口駅
- 2 防空壕 (素掘り)
- 3 防空壕 (CO 製)
- 4 退避壕・地下防空壕 (CO 製)
- 5 爆弾庫 (CO 製)
- 6 地下防空壕 (CO 製)
- 7 機銃座
- 8 防空壕 (CO 製)
- 9 地下防空壕 (CO 製)
- 10 地下燃料貯蔵庫 (CO 製)
- 11 防空壕 (CO 製)
- 12 防空壕 (CO 製)
- 13 防空壕 (CO 製)
- 14 防空壕 (CO 製)
- 15 防空壕 (CO 製)
- 16 防空壕 (CO 製)
- 17 エプロン
- 18 防空壕 (CO 製)
- 19 防空壕 (CO 製)
- 20 防空壕 (CO 製)
- 21 防空壕 (CO 製)
- 22 機銃座
- 23 貯水槽 (CO 製)
- 24 防空壕 (CO 製)
- 25 地下防空壕 (CO 製)
- 26 滑走路
- 27 鶉野平和祈念の碑苑
- 28 機銃座
- 29 防空壕 (CO 製)

(国土地理院発行 2 万 5 千分 1 地形図使用)

(CO 製：コンクリート製)

今に残された戦争施設

() 番号はマップ番号に対応する

姫路海軍航空隊への出入口



北条鉄道法華口駅の駅舎 (1)



法華口駅の看板

(看板は塗り直しされているが、薄く右書きの駅名が見える。
左方向は網引駅になっており、田原駅は当時まだ無かった。)

駅から基地へ至る道



隊門へ向かう道



素掘り防空壕 (2)

(内部はコの字形に曲がり別の出入口につながる。コの字形防空壕2箇所、直線形防空壕1箇所がある。)



衛兵詰所付近の施設



詰所前の防空壕 (3)



(内部は凸型に屈曲しており 2 箇所の出入口でつながる。)

詰所裏の退避壕 (4)



退避壕下の防空壕



(防空壕の天井はアーチ状を呈し、換気口が設けられている。)



庁舎南側の施設



爆弾庫 (5)

(壁厚は約 1 m を測り、前面には爆風避けの土堤が設けられている。)



(天井はアーチ状を呈し、奥壁に換気口が設けられている。
目地部分に木片が残る。)



地下防空壕 (6)



(内部は仕切りがあり小部屋に分割されている。)

兵舎南側の機銃座



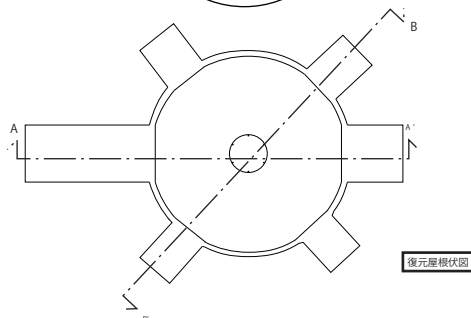
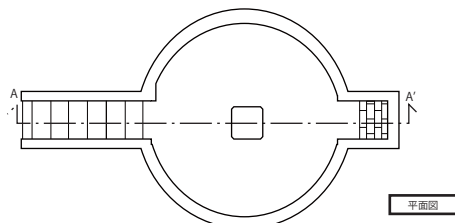
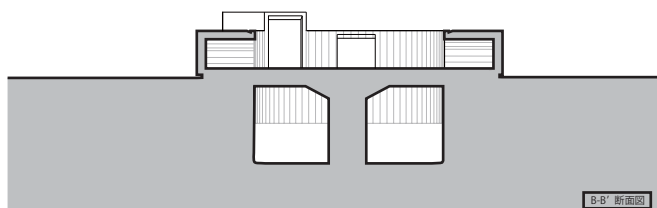
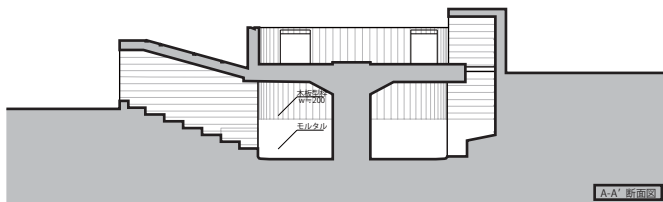
機銃座 (7)



(機銃部から地下
へ降りる昇降口)



(地上部から地下
へ降りる階段)



機銃座 (7) 測量図 (縮尺 1 : 200)

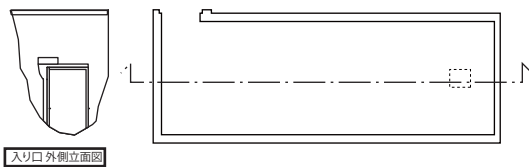
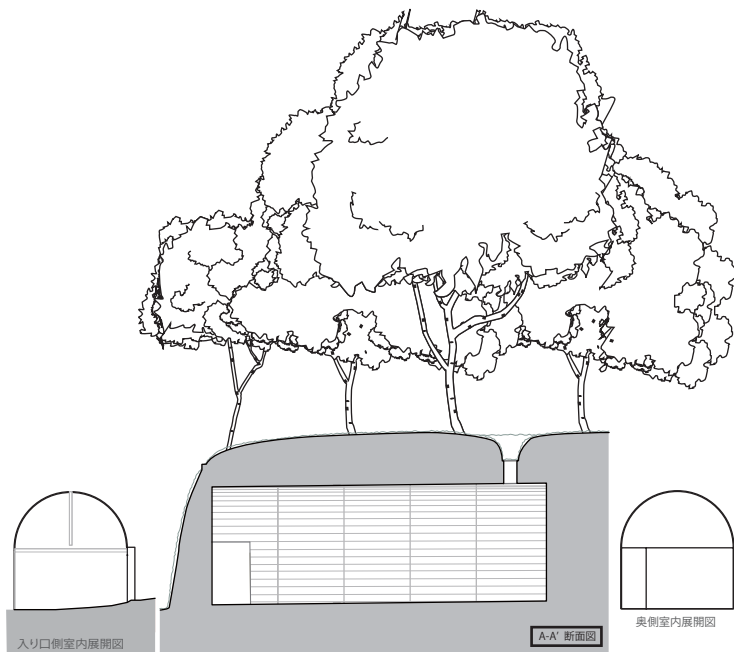
基地南側の施設



防空壕 (8)



(アーチ状の天井)



防空壕 (8) 測量図 (縮尺 1 : 200)

地下防空壕 (9)

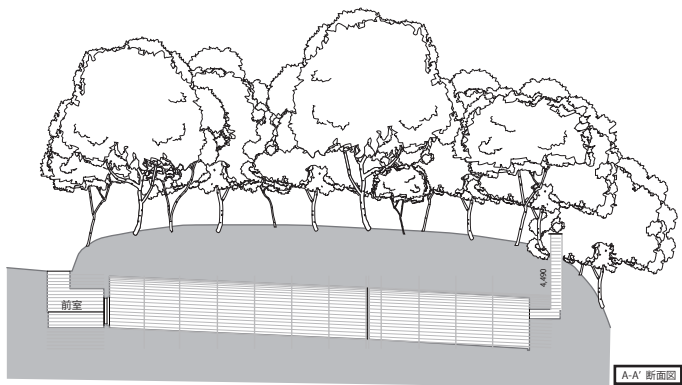


(内部から見た入口)



(くの字形に屈曲
する室内)

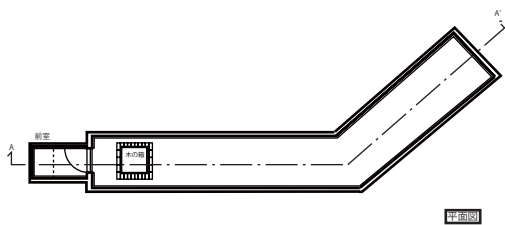
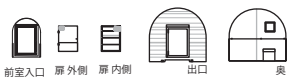




前室内展開図



開口部詳細図



地下防空壕 (9) 測量図 (縮尺 1 : 400)

庁舎東側の施設



防空壕(11)



防空壕(12)

庁舎北側の施設



防空壕(13)
(基地内最大の防空壕)

格納庫南側の施設



貯水槽 (14)



(牛舎横の水路は基地
当時のものが残る。)



(映画「火垂の墓」の
ロケが行われた道路)

辰池西側の施設



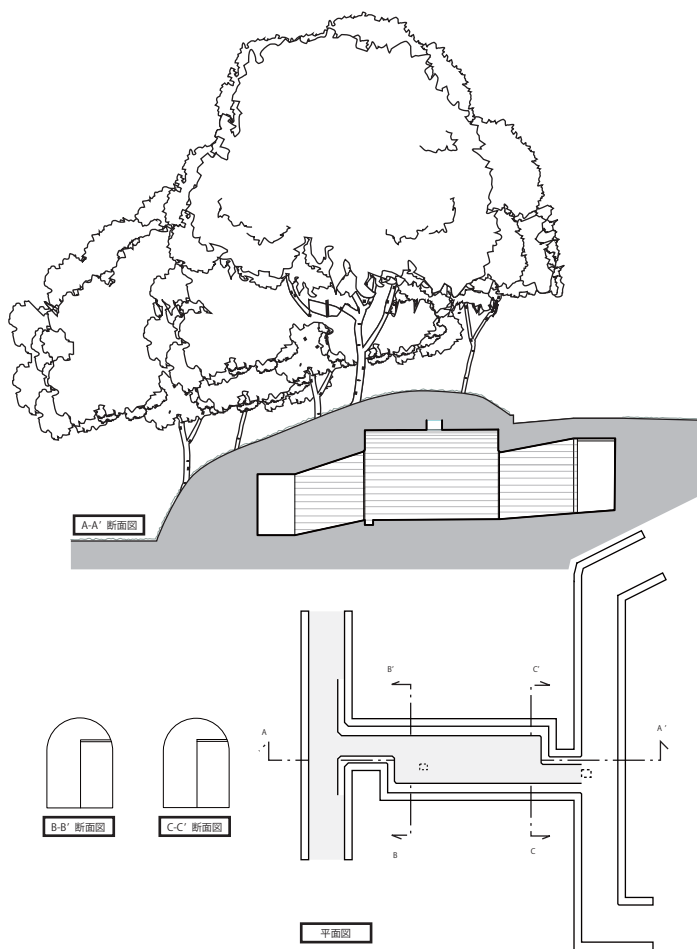
防空壕(15)

(内部はH形につながり
出入口は4箇所ある。)



(中央部屋の天井は
アーチ状を呈する。)





防空壕 (15) 測量圖 (縮尺 1 : 200)

格納庫周辺の施設



エプロン(17)



防空壕(18)



防空壕(19)

送信所周辺の施設



防空壕(20)



防空壕(21)



暗渠排水施設



貯水枡

滑走路周辺の施設



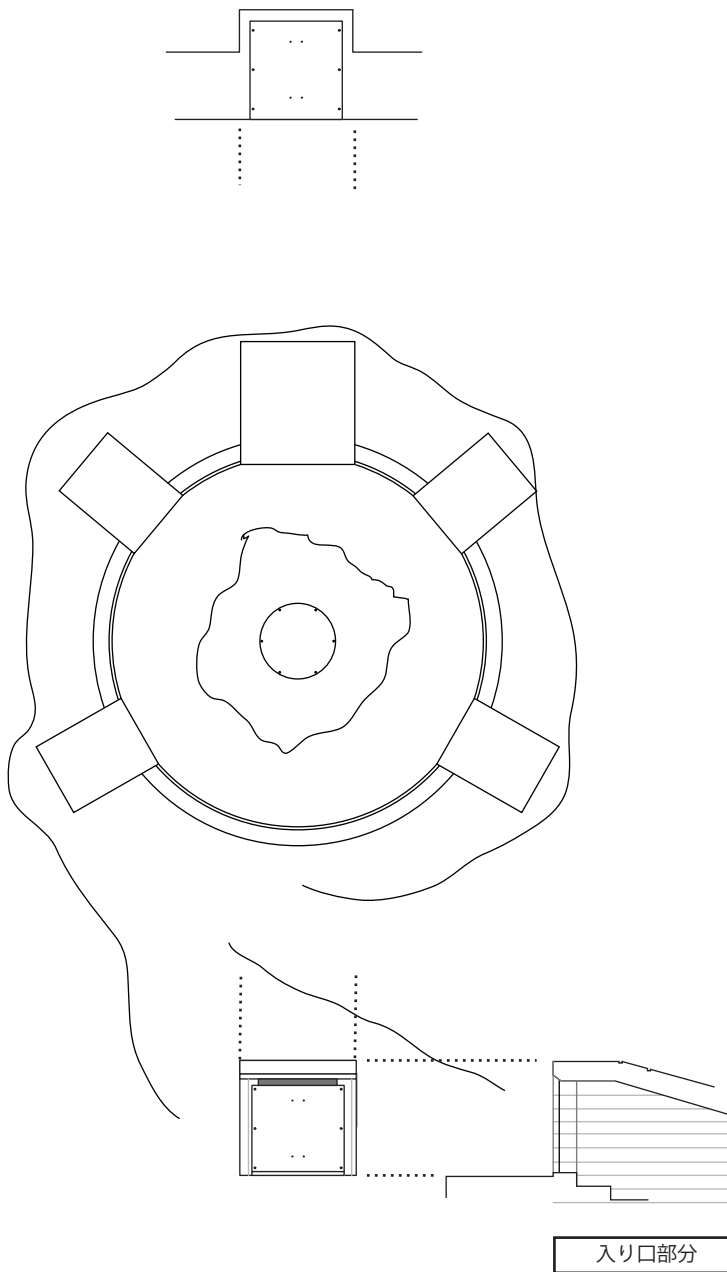
機銃座 (28)



(中央部の銃座)



(地上部の出入口)



機銃座 (28) 測量図 (縮尺 1 : 100)



滑走路 (26)



鶉野平和祈念の碑苑 (27)

本冊子は、芸術文化振興基金助成金・
加西市ふるさと応援寄付金を活用し作成しました。
本冊子作成にあたり、上谷昭夫氏をはじめ鶉野平和
祈念の碑苑保存会、地域の皆様方のご協力をいた
だきました。

加西・鶉野飛行場跡

(旧 姫路海軍航空隊基地)

2011.3

編集 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター
加西市教育委員会
発行 加西市教育委員会



芸術文化振興基金

芸術文化振興基金助成事業

神戸大学・加西市共同研究

鷯野飛行場関係歴史遺産基礎調査

